

【鵜飼と一茶の句】

日本の鵜飼に使う鳥の種類はウミウが中心である。稀にカワウも使う。鵜の仲間は海のカラスとも言われ賢い鳥である。日本にはウミウ、カワウ、ヒメウの3種類がいるが、ウミウは冬の渡り鳥であり、3月ころ北に戻る。カワウは留鳥であり、最近アユを始めとした内水面漁業に大きな被害をもたらす害鳥問題を引き起こしている。日本の鵜飼は野生のウミウを捕獲して訓練をして鵜飼の鵜として使われる。冬の日本海を旅すると岩礁に羽を広げているウミウをととき見かける。中国の鵜飼の鵜はカワウを使うのが普通である。最近宇治川の鵜飼で異変が起きた。鵜匠の澤木万里子さんが使っているウミウが卵を生んだのでそれを人工孵化して育てた。ウツテイと名付けられて鵜飼の鵜として訓練を受けているが、日本の鵜飼で卵を生み、育てられた例は今までにない。中国の鵜飼の鵜はすべて人間によって人工孵化された鵜であるが、これが中国と日本の鵜飼の大きな違いのひとつでもある。一茶の句に「はなれ鵜の子のなく舟にもどりけり」があるが、これは鵜が卵を生んで育てた例外なのか。